毎月1回20日発行　　第3種郵便物認可（昭和31年3月28日）　①

山と博物館

第 3 巻　第4号　1958年4月20日

融雪によつて黒く現われた・雄勢なシシの岩はだ

大町山岳博物館

山や里のことなど

長沢欽平

中部山岳の山々はまことに宇内の大観と嘆称した日本アルプス連峰はいつの間にか名前が変っている。
享保年間大沢寺と大町外八ヶ村との公事（くじ）は幕府の裁決で領分地域の決定を見たがその画図に五六ヶ峰とある。浅井例先生の北安曇の唱歌に「数え来たらば山の名も四五六岳に止まらず」と語呂を合せているのも五六岳のことである。
これは爺ヶ岳の前山をさすので昔の文書にも里で高くない山を峰、相当大きい高いものを岳、奥山の一番高いのを獄と区分してある。爺ヶ岳はご承知のように苗代（なわしろ）種まき季節に岩の頭に雪の消え加減で黒い種まき爺さんが現われる。北の白馬岳にも同様、代かきの時黒い馬がその季節に現われる。里人がそれをある程度、もといとして種おろしや耕作に着手する習しがあり農家には深い親しみがあった。
この山は杓子岳とその南の白馬鎗と合せて昔は大蓮華山と呼んだ。有名になったのは大町小学校長・植物学者河野齢藏先生や山の権威者百瀬慎太郎氏におうところが大きい。

鹿島槍ヶ岳は昔鶴ヶ岳といった。鶴の姿が現われるからである。またシシが現われるのでシシ岳とも呼ばれたことがあった。黒い岩はだが下向きになった雄勢なシシの姿になって見られるからである。（表紙写真）
今の名前を鹿島というのは火山脈地帯で従って古来地震ひんぴん、災害がいちじるしいので、常陸（ひたち）の国から地震の神鹿島さまを迎えて要石（かなめいし）をすえ神の名を借りて山の名、川の名、部落の名、ことごとくを改め、国土の安泰（あんたい）を祈った。こゝで大町の地震であるが強い大きい被害のあったのは最近では弘化三年世にいう善光寺地震があった。霊松寺、大沢寺もその時倒壊、火を発し、ちょうど大町の荒神（こうじん）祭典に角力取締年寄浦風林右エ門のひきいる江戸角力の力士やそのほか多くの死者を出した。今、墓碑は弾誓寺境内にある。この地震災害で郷里不明の旅人無数をまい葬した無縁供養塔は大町税務署のわきにある。
さて話は前にもどるが神社の所在部落を鹿島と呼び、平家の落武者のあとだともいわれている。今も戸数の制限があり分家は他へ転出せねばならないならわしが行われている。

鹿島川は以前は駒沢川（こまざわ）という名称であった。山麓付近に信濃の三沢寺とまでいわれる有名な大沢寺がある。城主仁科氏の祈願所であって田村将軍が奥羽征伐の時、賊平定を祈った所、維新まで駒沢村といい、大沢寺領であった。そのわきを流れるから駒沢川と呼んだのである。城主仁科氏の援護が多く郡外水内（みのち）付近に多数の末寺があるのを見ても盛んにかつ勢力のあったことが知られる。

仁科の三湖（青木湖、中綱湖、木崎湖）はその裾で青木北を分水嶺として佐野坂があり北は姫川が日本海に流れるが昔は厭川（いとい川）といい高落差の川、荒れ狂う川、いやな川のたとえであった。今は川尻にわずかに糸魚川の地名を残すに過ぎない。この地点は大国主の命の夫人の生まれた地、奴奈川の地名が姫の名前で川も転じて姫川といったものである。この姫川上流の神城に五竜岳がある。この五竜岳の北、大黒岳は昔から銅の採掘が行われ、大町の平林佐五右エ門（八日町かく平）が経営していた。文政の凶年に四ヶ庄（しかじょう）より起った赤襷騒動記録には①「かような神霊の宿った岳山を荒すにより陽気が悪い」と称し襲撃の目標としており、ほかに②われわれの生産した麻を安く仕切りに買われた

から麻商を、③栗林大庄屋宅にはわれわれが山論に敗けた文書があるはず、子孫に残したくない、こゝでは努めて文書を焼却せよ、④酒屋は自己の利益のために米を酒にするから米価が暴騰するから酒屋を、という四つの目標がかゝげられていた。
赤簑とは騒動の人は皆、山ぶどうの木の皮で作った野宿に適する簑を着ていたからである。

鈴ケ岳の南を屏風岳と呼び屏風のようになった山々。今は細別して岩小屋沢岳、鳴沢岳、赤沢岳、スバリ岳になった。今黒部第四発電所並にそのダム建設のため工事物資運搬の基地に北大町駅が設けられ輸送路として赤沢岳に隧道掘鑿、今年の二月に貫通した。
針の木に源を発する川を籠川（かごがわ）といい、むかしの文書には加賀川と書いてある。加賀方面から流れてくるというのである。この川は平（たいら）の犬の窪（くぼ）源汲（げんゆう）部落の西山にはばまれ高瀬川と鹿島川の合流点上に三つの川が合流するのである。
寛政年中大町大原部落の新発（開こんのこと）に木崎湖の水を灌漑している湖岸の森村、木崎村、現在の社区になる松崎村、常光寺、館ノ内村（たてのうちむら）木舟村潤田村（うるうだ）曾根原村（そねばらむら）丹生（にうのみ）の小村より異議が出て、大町村は源汲の上の山を掘割り鹿島川へ補給する雄大無比の大工事を完工して人々を驚かせた。異議のある部落は鹿島の上流より木崎湖に補給する越荒沢という用水によって関係があり猫鼻（ねこはな）の水を大町が大原の開こんのために取水することは困るということであった。

大町の大洪水は猫鼻の川除（堤防）が切れ一べんに大町に押寄せた。これがため東山に飛びつき避難しようとしたものは窪地の農具川の畔でみな溺れ、反対に西に逃げた者は助ったという。
文部省において昭和十年国宝王子神社の解体修理の際、発見したことはその基礎石がこの洪水のため土砂が四尺五寸も堆積していたことで、いかに大洪水で災害が多く悲惨であったかがわかる。

針ノ木峠は昔戦国の世、佐々成政が越えて信州入り、大姥さまを越中立山から奉遵したと伝えられる峠で、サラサラ峠ともいう。
平区大出には大姥（おおば）堂があり、このゆかりの仏像、木彫、座像、丈一尺二寸、手は金剛界の印（両手の指を組む）を結んで、口を半分開き、乳房がたれ、頭は垂髪である。今、立山には同型のものが六十六体あり、維新の廃仏によって、仏像は分離され実相院の所有になった。大姥さま跡は雄山神社となり、事変まで社格は国幣小社であった。
立山より奉遷した證拠に寸法、面相がみな同じであると富山県教育委員会から回答があった。

屏風の南を蓮華岳、次が北葛岳その尾根の裾が笹平発電所のある所。
発電計画は明治年間、桂二郎の水利権、後に明治水力電気といった当時、上原（わっぱら）が工場予定地で、起った電気はみな自家用として消費の予定であった。上原は別に大町から運搬軌道を設けねばならぬ不利があり、これが千葉県の森のぶてる、秋田県の田中隆三などによって開発され、今の昭和電工となったものである。昔いたずらに高く不毛の山も今は一万尺の山々に雪のタンクを持つ日本有数の安価な電源地、高落差のしかも流速があり流域も広い。これが今は呉羽紡績や昭和電工々場の設置をみたもとなのである。
水源は槍ケ岳、湯股、水股沢から、双六岳、鷲羽岳、野口五郎岳、烏帽子岳から、えんえん十里にわたる国境の山々の水も一度はこの発電所を通るのである。

信州文学碑散歩

（4）

屋代東高等学校教諭　福沢武一

芭蕉句碑　＝松本市宮淵城山公園＝

用事で松本へ出たついでに市内を一巡する。その果てに城山へのぼっていく。

一たんのぼりつめたところに篷田空穂の歌碑がある。

鉦（かね）ならし信濃の国をゆきゆかばありしながらの母見るらむか

あたりに松の巨木がそびえ、風が梢を渡っている。しばしたたずんで眺望を楽しむ。市街地の先、中山の丘陵があり、その先は霞んでいる。

城山の頂はこぶのような隆起が続いている。それをのぼりつおりつしたところ、松の木蔭の碑が目にとまる。そこに芭蕉句碑が立っていようとは今の今まで思っていなかった。

花ざかり山は日頃の朝ぼらけ　　芭蕉翁　梅室拝書

碑は傾斜地を背にしている。高さは1メーター。早速拓本のために碑面を洗いにかかる。松の花粉かなぞが分厚くたまっている。洗っても洗っても石垢が浮いてくる。こうして清めながら、碑面がただならずのけぞっていることを改めて意識する。軽く磨かれた面であることにも気がとまる。

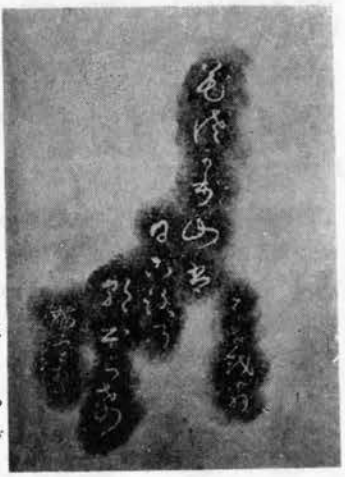
風があって、紙をあてがうのに可成りてこずらされるでき上ったところで気がつく。――この筆蹟は中々達者だ。しかも、ぞんざいに流れず、一字一字念を入れてしたためている。草書の手本にでもするのにあつらえむき

筆者梅井梅室は俳壇における天保三大家の一人ときいている。筆蹟に接するのはこれが最初。月並調といわれる彼。この達筆を目にし、俳句をも見なおしたい位。碑蔭に**弘化四年春**とあり、建立者として**梅庵風也、霽壁堂探々**の名が誌されている。

紙を碑面からはがす。裏側が石垢でよごれている。新聞紙の間にはさんで巻く。そんなことをしている時、目籠を背負った娘が山脇の小道を通っていく。

道具を片付け、やおら碑の傍を離れる。道は山脇ずたいに松の木蔭をぬう。

畑地にでる。さっきの娘が雑木の中で落葉を掻いている。そこを通りぬけ、次の傾斜地へさしかかる。その小高い頂にも松の茂みが見えている。



後記　岩崎睦夫氏は「松本平の歌碑と句碑」の中で次のように述べられる。風也は松本藩の作事方で、城山に常住し、附近の粘土を瓢別して風也焼を創めた水崎佐次兵衛と思う。この人は学問技量あり、乾山荘風也と号した。

レポート

遭難救助訓練

谷川、穂高、鹿島は日本山岳の三大遭難名所とまで悪口をいわれ〝魔の山〟として恐れられている。その反面これらのバラエテイに富む山岳への魅力はますます高まりつゝある。登山人口に比例するかの如く遭難の続出に頭を悩ましていた地元では、32年遭難対策協議会を設けた。この会と観光課、観光協会らが合同で開いたのが遭難救助の実施訓練で、去る3月25日から2日間、鹿島山麓冷沢本沢で行われた。主な内容は雪中ビバーク、フォストビバーク、しばぞりによる負傷者の搬出、岩場の負傷者搬出などの基礎的なことであるが欠くことのできない常識である。始めての試みで、いろいろと内容、方法などに研究の余地があり、今後への課題もあるが、例年続けたいものである。またこれら有意義な催しを広く登山者の参加もあって、岳人が個々において身につけておいて貰いたい。夜間座談会が催され、地元より実際の経験から話題が出された。近年登山者への戒めのためか、ジャーナリストの目も光るが、これに恐れず敏速にかつ事故を最小限、短時間に処理できるようにすること、地元の協力には、経済面は勿論、それでは割り切れない援助に対し、最大の謝意を表すことなどが結論であった。

【写真は負傷者の搬出訓練から】

信濃のサクラ

京大木曾生物研究所　横内　斎

信濃の山や野をかざるサクラ類は、いろいろあるが、その代表的なものは三種であろう。

一つは寒い方を代表する北方系であって、花の大きい桃色で美しいエゾヤマザクラで、この種は北海道から本州に入って、大江（おおえ）山まで広がっている。信濃では、北の方に多く、南下するにしたがって少い。下水内（しもみのち）郡の北部には産しない。次はカスミザクラで、本州全体に広がって、九州の福岡県までいっている。信濃では下水内の北部と、木曾谷と下伊那の南のごく一部に産しないが、ほかには全部ある。私たちがヤマザクラといっているのはこれで、どこでもみられる種類で、葉や花の柄などに毛があり、ケヤマザクラの別名もある。花の色は白に近いものから、サクラ色まである花と葉と同時に開く。次はまことのヤマザクラで、これは九州・四国・本州の南などの暖い地方に、その広がりをおく種類で、〝道もせに散るやまざくら〟と詠んだ茨城（いばらき）県の北の方まで広がっている。

信濃では、木曾谷や伊那谷のもっとも南にみられる。すなわち木曾川や天竜川の県境の附近にみられる。カスミザクラの入っていない所にあるわけで、これはこの二つの河ぞいに広がってきたことを示している。気候からいえば信濃で一番暖い地方で、一年間の平均気温がC12度を示している。

花はさびしく灌木（かんぼく）性のものに、チョウジザクラがある。花のつつが外のサクラ類よりも長いのですぐみわけがつく。この種は、中信濃から南に多い。北信濃では、これによくにたオクチョウジザクラがある。これは前種よりも花づきが多い。下水内辺にはことに多く、同郡の北部はこの種のみでなかなか美しい。この種は山頂を南に進んで、筑摩山脈の武石（たけし）峯まできている。

一種マメザクラというものがある。本州中部の特産で富士山を中心として栄えているので、フジザクラの別名がある。これが山梨（やまなし）県から、諏訪、佐久に入りこんでいる。八が岳の一峯の西岳のごときは、列をなして生えている。花は小形だが実(み)はわりあい大形で、味は少しにがみがある。この種が松本市の北の中川という所まで入りこんでいる。

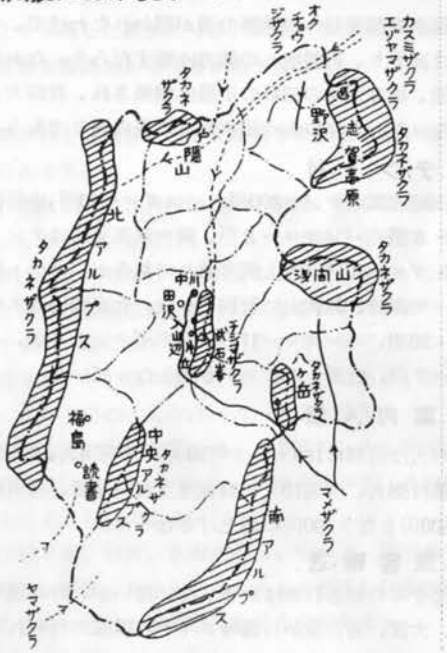
高い山へ登るとミネザクラ一名タカネザクラという種類がある。高い所では灌木形であるが、低い所では高木になる。三アルプスをはじめ、戸隠（とがくし）浅間（あさま）の連峯、八ヶ岳、美ヶ原などの高い所は、みなこれである。上高地の六月初めの、花のトンネルの大部分もこの種でかざられる。

筑摩山脈の武石峯のサクラは、千島と共通のチシマザクラだということが、この頃わかってきた。たいへん興味のあることで、植物の生命発展の問題を考える上に重要なことである。この外野生のサクラ類に、一重と八重の花がまじって咲く、ヒトエヤエカスミザクラというめずらしい種類が、東筑摩郡片丘（かたおか）村や、木曾の福島町の山中にみつかっている。この外ミヤマザクラやウワミズザクラ、イヌザクラという種類もある。

近頃どこの公園や学校などに植えられるものに、ソメイヨシノザクラというものがある。

これは朝鮮の済州（さいしゅう）島が、原産地だといわれている、成長も早く花つきもよいので、植えられるのであるが、品格のない種類である。ヒガンザクラとその変種のシダレヒガンは、花色もよく花数も多くて品があり、長生きの木である。寺や社にみかける。一年の間に、春四月と秋十月の二回咲く、ジュウガツザクラというめずらしい種類は、野沢温泉や田沢の上川手小学校や木曾の読書小学校の庭にみられる。

信濃における野生サクラ類の分布



融雪を待っていたかのごとく、自然界は活況を呈するが、人の社会も同じく活潑な動きを見せる。特にシーズンを待って開業する人々はその年の計画を真剣に考えてくる。こゝ自然界の恩恵に浴する北アルプスも例年のことながら、毎年やってくる登山者や観光客の受入準備に懸命である。昨年より1カ月早く4月8日に大町市で10日には松本市でそれぞれ関係者が集まって打合せ会が開かれた。

1.山小屋と旅館

小屋の位置、施設などの条件によって、宿泊料の相違は見られるが本年は一部をのぞいて30～50円の引上げがあった。サーヴィスの向上をはかるため、ボッカの値上りなどに原因があるようだ。が宿泊料の引上げは、登山客のテント生活への移行も懸念されてる。新しく湯俣山荘、湯俣温泉、ヒュッテ大槍、沢渡湯の花山荘が営業を始めた。

奥深き高瀬渓谷への探勝の道が開かれたわけで、今後利用は高まり、新展地への魅力は増すだろう。なお烏帽子小屋、穂高連峯の三軒の小屋は増築され、收容力が二倍となった。本年の山小屋状況は別表の通りである。

2.テント村

上高地方面にテント200張、バンガロー40戸、中房温泉テント5張、バンガロー5戸、美ヶ原高原にはテント80張バンガロー40戸、以上例年通りであるが、テント場は高ボッチ高原、鉢伏山に新設された。北安関係は木崎湖テント26張、バンガロー17戸、青木湖テント6張、バンガロー7戸、白馬大池テント5張となっている。

3.案内人組合

案内人は白馬村160人、大町30人、有明28人、常念26人、安曇村68人、大滝10人で料金は主食交通費、宿泊料客持で600円となり100円の値上げとなった。

4.旅客輸送

まだ今年の輸送計画は決まっていないが、昨年通り、新宿、大阪、名古屋から臨時ダイヤの編成が行われる見込みである。バスは各地の路線の修理が行われ、整備、拡大を急ぐが、運行本数は昨年と殆んど変っていない。

5.遭難対策

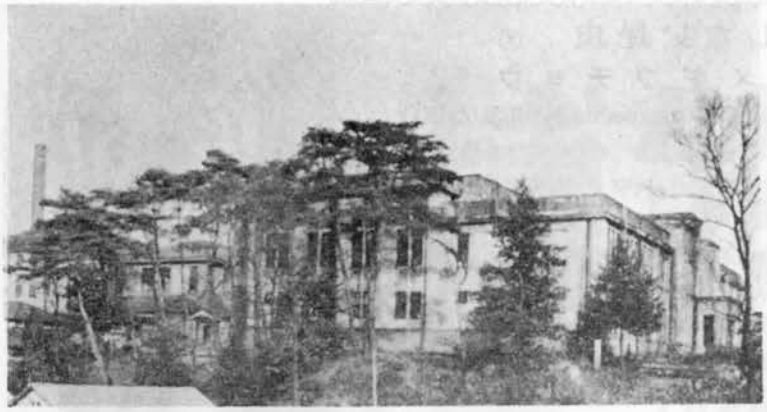
登山者へは名簿の記入、気象予報への関心、山小屋関係者の忠告を厳守することなどが望まれ、地元では道標の完備、気象予報の掲示「山岳パトロール」を実施する。厚生省では、国立公園管理のため指導員の巡視が行われる。なお北アルプスの医療機関は次の通りである。

白馬岳（白馬山荘）昭和医大、槍ケ岳（槍ケ岳山荘）慈恵医大、徳沢（徳沢園）日大医学部、乗鞍岳（宇宙線観測所）名古屋医大、阪大医学部、乗鞍山麓（鈴蘭小屋）東大医学部、燕岳（燕山荘）順天堂医大、濁沢（濁沢ヒュッテ）日大医学部、西穂高岳（西穂山荘）東邦大医学部、白骨温泉、信州大学医学部、穂高岳（穂高山荘）岐阜医大

6.通信機関

乗鞍岳、燕岳、槍ケ岳、白馬岳には夏山最盛期に臨時電話が架設される。

山小屋名	所在地	收容力	宿泊料
白馬方面			
大池小屋	白馬大池	80人	530円
猿倉小屋	白馬尻二股間	200	530
二股別館	二股	150	530
白馬尻小屋	白馬岳大雪渓下	100	500
白馬山荘	白馬頂上	500	500
白馬頂上ホテル	白馬岳山稜	500	530
白馬ヤリ温泉	ヤリガ岳中腹	150	500
唐松小屋	唐松岳	180	530
遠見小屋	遠見尾根	30	480
八峰キレット小屋	鹿島五竜の中間	30	550
五竜小屋	五竜岳	80	530
栂池ヒュッテ	栂池	80	500
黒菱小屋	八方尾根	200	480
鹿島針ノ木方面			
大沢小屋	籠川谷	40	480
針ノ木小屋	針ノ木峠	70	530
冷池小屋	爺ケ岳布引岳間	80	530
種池小屋	爺ケ岳鳴沢岳間	40	530
葛、烏帽子方面			
舟窪小屋	蓮華岳烏帽子岳間	30	530
烏帽子小屋	烏帽子岳	100	530
濁小屋休憩所	濁沢出合	休憩所	1人10円
湯俣温泉旅館	湯俣水俣出合	80	500
湯俣山荘	〃	50	500
三俣蓮華小屋	三俣蓮華岳	200	530
黒部五郎小屋	黒部五郎岳	20	無料休憩所
双六小屋	双六岳	100	530



日本のはくぶつかん

労働科学資料館

かって労働科学研究所の実態調査や、研究結果の資料及び実物を、参考に供する目的で、労働科学博物館を大阪の天寺に開設しましたが、３０年９月東京の研究所内に再び公開したものが、現在のものです。

この資料館は、労働科学研究所（東京・世田谷・祖師谷２丁目・小田急祖師谷大蔵駅下車徒歩七分、電話東京41局7470～3番）内にあります。

展示場は１９室と廊下の壁面からなっており労研多年の研究になる資料の図解、写真を掲示し、展示場の他に開設した研究室は、本館１階で、そのうち３室は職業病関係検査室、診療室などに使用し、２室はそれぞれ事務室、学芸員室、１室は受付及び案内室とし、他の１３室は各種工場事業場のメーカーの最近の製品を陳列してあります。見学者は官庁、会社、工場鑛山、病院診療所、労働組合、学校一般ですが、最近は特に各種の団体が多く、この場合は１図解位は講堂で、要望によって研究会を開いたりしています。このように労働科学への関心が社会一般へ拡がっていく事に喜びをもち、資料館の充実にこゝろがけております。

「壁面に掲げてある図表と写真」

労働衛生関係　～約15枚
労働生理関係～約20枚
生科学栄養関係～〃20〃　労働病理関係～〃10〃
労働心理関係　～〃15〃
農業、林業、社会科学関係～約15枚　働関係その他約10枚

「標本と測定器具」

労働衛生関係～約 30点　労働生理関係～約15点
労働病理関係～〃100〃　労働心理関係～〃20〃

などですが、時折模様替をしております。

尚開館は毎日10～4時で日曜、土曜、祭日並に年2回約１ヶ月休館をしていますので参観者は予め御連絡ください

＝ 山博の友 ＝

染色工芸の会

自分の手で作る喜び

岳都大町に住んでいてだれしもが感ずるのは、四季を色どる自然の美しさである。常に私たちをなぐさめてくれるこの美しい色彩が自分の手で生活の中に還元することができたら、どんなに豊かな生活を営むことができるできるであろう。

昔から日本人は染めものゝ上手な民族であり、染めものにめぐまれた生活をしているものもすくなくないといわれている。最近若い人の間で盛んな蠟染は、立派な作品が正倉院の中にも残されているように非常に古くから行なわれていたものである。その後蠟染は忘れられたが、（現代の蠟染は千年もたった大正時代に復活された）糯粉を用いる糊染がすばらしく発展して、友禅染が染ものを代表するようになった。いうまでもなく化学染料が主み出される以前の染料は、自然にある草根木皮等いわゆる植物染料や顔料が主で、この自然から得た巾広い色相や色と色とがふしぎに調和する温雅で渋い色彩は、南画や浮世絵の民族性に共通するもので、私たちの風土を象徴するものである。

私たちの染色の会も遠い夢かもしれないが、染色の材料が特に豊富なこの地方の自然から生みだされた民芸として、多くの人々に親しまれ、生活をうるおすことができたらということが終局の目的である。買うことだけになれた、機械的な生活の中で、たとえ不手際でも自分の手で作ること、生みだすことの楽しみを見出そうというのが会員一人々々の願いである。

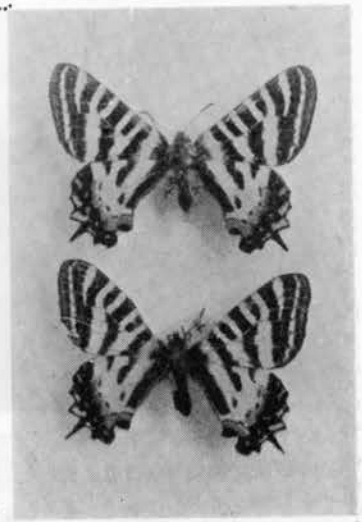
この会は昨年九月、博物館同好会と発足し、毎月二回の例会を開き、蠟染の実習や作品展示会、植物染料の採集会など併せて行ってきたが、今年一月より博物館から独立し、自主的な組織として実習、作品展示会、植物採集、展覧会、並びにデパートの常設工芸部、各地研究所見学旅行など、研究活動を行うことになった。実習は①ローケチ法②糊染、簡引染法、型染法③捺染、摺込染法、版画染法、その他染色法全般にわたって行ない、会員相互の力で研究するとともに、中央の専門家を招へいし、講習会を開きつねに中央との技術提携を行い、技術の向上を計る。長くとざされた冬から解放され、新しいいぶきを感じさせるこのごろ、みんなに親しまれ、楽しさを味える会にして行きたい。

資料室

保護したい昆虫 ②

ヒメギフチョウ

Luhdorfia puziloi inexpecta SHELJUZHKO



黄と黒の美しいだんだら模様に赤色の飾りをつけたその姿はまさに「春の女神」のごとくで、ギフチョウと並んできわめて美しい。年一回春の非常に短い期間に限って現われること、分布が世界でも極東に限られていて、本種における分布の研究から、かつて≈Luehdorfia Line≈なる分布境界線まで提唱されたほどで、本州は生態学や生物地理学研究の興味深い材料でもあるので、生物に興味をもっているなら、誰でも知っているであろう。

このようにきわめて珍しい上に、学問上にも重要な生物なので、場所によっては天然記念物に指定されているほどである。

ところが本種は飛翔力が弱い上に、食草がウスバサイシン（山間の限られた場所にしか生えていない）に限られているので、発生場所さえ知っていれば採集は極めて容易である。

珍種あつかいされると採りたくなるのが常で、成虫ばかりでなく卵塊までも持ち去る者もある。こうなると絶滅は明らかで10年位前はきわめて沢山発生した場所でありながら乱獲したため、今ではその姿すら見られなくなった場所は小生の知るだけでもたくさんある。本種に限ったことではないが、愛すべき生物が年々姿を消していくのを想うと、やりきれない気持である。

【写真はヒメギフチョウ】

（八坂中学校　倉田　稔）

ゴールデンウイークの行事

上原遺跡展と考古展

昭和25年以来、上原（わっぱら）遺跡の調査が進められてきたが、さき頃調査報告も刊行になり、その全資料が博物館に收藏された。これを記念し、桜咲く本館で、4月29日より1週間、上原遺跡の資料公開と同時に信濃考古展が開催されることになった。内容は上原の遺物、土器、石器の展示、環状石離、竪穴の址の模型から、郡内の重要な遺物の公開、さらに特別出品の藤森栄一（諏訪）信大医学部第二解剖学教室、松本市立博物館、平出遺跡考古博物館、東京国学院大学などから、無土器、縄文弥生、古墳文化の遺物が光彩をそえ、始めて開催される考古展への期待は大きい。

≈人事往来≈　4月10日付辞令で、市役所業務員であった神社唯七氏が本館勤務となりました。

（今月の寄贈）　Nature Stuby（VoL6. No1,2,3,4）各1部大阪市立自然科学博物館　電気科学館だより1部大阪市立電気科学館　プラネタリウム（No.11,12,13）各2部天文博物館五島プラネタリウム　まどのゆき（No.23）1部積雪科学館　野鳥が巣箱等を利用するようすの観察記録（第5集）1部国立自然教育園　オーストリアスキー教程　ノウサギの生態各1部法政大学出版局相島敏夫　自然科学と博物館（25巻1～2号）1部国立科学博物館　山と渓谷（No,225）1部山と渓谷社　山嶺（No,335,336）各1部東京野歩路会国立公園（No,100,101）各1部厚生省国立公園協会

（敬称略）

春の山麓に集う少年少女八十名

春の訪れのおそい安曇野、この土地の桜の花がもうすぐ開こうとする4月20日、暖かな日曜日を利用して第1回少年野外教室が開かれました。この日、市公民館講堂に集った市内小中学生は男女合せて八十名でした。

本年度、山岳博物館が主催する野外教室の計画についてみんなで話し合った後、小、中学生に別れて公民館から博物館までの路傍の動植物の観察を行いました。博物館の芝生の上で昼食をとり、記念撮影をすませてから、みんなで車座になって一日の学習のまとめについて話し合い、楽しい一日の予定を終りました。

なお野外教室はこれからも毎月2回くらいづつ開催される予定です。

お願い　本紙の購読御希望の方は一カ年購読料170円（郵送料とも）を現金書留または郵便替為、郵便切手で長野県大町市、大町山岳博物館宛、ご送金下さい。

大町山岳博物館

山と博物館　第3巻第4号　1958年4月20日発行
発行所　長野県大町市TEL（大町）211
大町山岳博物館
印刷所　松本市巾上町353
信州印刷株式会社